

紀伊国屋三谷家コレクション 浮世絵をうる・つくる・みる

日比谷図書文化館(日比谷公園) 2021.07.17~09.19 前後期で展示替え



江戸時代に成立した「浮世絵」は、いまや日本画のジャンルの一つで、芸術として世界中で愛されている。

本展では、「うる」「つくる」「みる」をキーワードに、江戸～明治期に町の絵草紙屋で売られていた「浮世絵」が、人々のささやかな娯楽品として、また暮らしの貴重な情報源として親しまれていたことを紹介している。

展示作品は、千代田区指定文化財である紀伊国屋三谷家コレクションの「浮世絵 150 点余り」で、1660(万治3)年の創業以来、神田で金物問屋を営んでいた三谷家は、江戸時代後期の八代目当主・長三郎(1819~1886)の時代に、浮世絵師たちのパトロンとなってその制作に関与したと伝えられている。

- <展示構成>
- 第1章 浮世絵をうる —江戸の浮世絵ショップ—
 - 第2章 浮世絵をつくる —職人とパトロン—
 - 第3章 浮世絵をみる —鑑賞と実用—



三代歌川豊国《四代目中村歌右衛門の石川五右衛門》 前期

本展では、三代「豊国」や「国芳」の画稿(下絵)など三谷家に届けられた貴重な資料をもとに、普段は明らかにされることのない浮世絵制作の裏側にも迫り、当時の暮らしに華を添えた色鮮やかで闊達な浮世絵の世界を堪能することができる企画となっている。



月岡芳年 《月百姿神事残月》 後期

「月百姿シリーズ」は100作品制作されているが、本作は、江戸時代の情景を回顧的に描いた赤坂の山王権限(明治元年日枝神社と改称)の祭礼の山車行列である。

画面の背景は江戸城の内堀の土手で、近景に大きく描かれている山車は「加茂能人形」と称されて、能楽「加茂」の後シテ、別雷神(わけいかづちのかみ)が右手に御幣を持つものである。四方幕には加茂の競馬が、見送り幕には流水に二葉葵の文様の織物が描かれている。